

## ヴォーリズ博士と竹中藤右衛門氏

渡 辺 久 雄

ヴォーリズ博士が一九三四年のジャパン・アドヴァタイザー紙に寄稿した手記は二つある。一つは同年二月二日付の「ジ・アーキテクツ・ステートメント」で、神戸女学院建築設計に当たつての姿勢、心構えといったものであり、他の一つは同年二月十一日付の建築設計個々の内容にわたるものである。

「ジ・アーキテクツ・ステートメント」の冒頭において、ヴォーリズ博士は次のように述べている。「学校建築の設計をする為には、教育全般について学ぶ必要がある。われわれの健康も、能力も、人格も、すべてがそこに住み、その中で活動する建物の品質によって影響を受けるのである。従つて、われわれが、人生の良き部分をそこで過ごせるような建物を設計することは、むしろ大きな責任でもある」。この言葉の中に、ヴォーリズ博士の教育施設の設計に臨む姿勢を窺うことができる。

この前文に続いて、今回の新設計を引き受けたことについての五つの理由を述べている。即ち(一)円満な人格教育を目的とし、又それが十分可能な神戸女学院の設計であること (二)優れた自然環境の地に新設計を試みることの喜び (三)古いものにとらわれず、新しい試みが許されること (四)神戸女学院当局の好意と協力 (五)新しい建物が学生達に与



W. M. ヴォーリズ博士

えるであろう影響についての期待、である。

このうち、ヴォーリズ博士が特に強調しているのは第五の理由である。それは建築設計者が、教育効果を考へての設計である限り、最も関心の高かったところである。こうした手記の内容は、一括して巻末の欧文ペーじに掲載する。

以上の第一の手記の次に、建築設計の内容に関する第二の手記について述べることにする。これも前者同様、ジャパン・アドヴァタイザー紙に掲載されたものであるが、この手記と掲載記事との間には、若干の相違が見られる。新聞編集者の意図によるものであろう。本誌巻末の分は、もちろん本人の原稿である。

昭和九年（一九三四）四月十八日に落成式を挙行した神戸女学院岡田山新校舎は、昭和五十九年（一九八四）の春で満五〇年目を迎える。従って大戦争を挟んだ半世紀の歴史の数々が、現校舎に秘められていることを思うとき、感慨深いものがある。

岡田山の中央に立地し、周囲の自然環境にまことに良く調和して建つクリーム色の校舎は、五〇年の年月を感じさせぬ程、しっかりと立っている。南欧調の建築様式と、見事な内装とは、いずれの日にか重要文化財の指定を受けることになるであろう。しかしこうした校舎が偶然に出来上がったものではなく、神戸女学院に理解深い優れた設計者と、さまざまな点で絶大の協力を惜しまなかった建設業者の創作と言えるであろう。従って今回は、五〇年前の新校

舎建設に関する若干の史料の紹介を試みることにした。その一が、本稿の最初に掲げたヴォーリズ博士のステートメントに引き続き同氏の手記であり、その二が建設業者、竹中工務店の代表者、竹中藤右衛門氏の手記であり、いずれもデフォレスト文書に収録されているものによった。

ヴォーリズ博士の手記の標題は「神戸女学院の施設について——設計者の立場から見た——」となっているが、ジヤパン・アドヴァタイザー紙の掲載分では「魅力的な神戸女学院設計における地中海風な特色」と変更されている。

設計者としてのヴォーリズ博士が、いかに優れた構想のもとに、この見事な神戸女学院の建物を設計したかは、半世紀を経た今日、この建物を眺めたとき、しみじみと感ぜられる。建物配置が示す自然景観への優れた調和といい、建物の一つ一つから滲み出る個性の素晴らしさ、内装における細やかな配慮が示す教育的効果の大きさなど、どれ一つをとってみても、五〇年前の構想とは考えにくい程に現在のなものである。これこそ優れた先覚者にして初めてなし得ることであり、われわれはその先読みの偉業に対して深く敬意を表するものである。

さて手記の冒頭において、ヴォーリズ博士は真つ先に自然環境保全の問題に触れて、次のように言う。「一つの建物をその場所に建てるに必要な平坦面を造る目的で、美しい自然景観を切り貼りする考えはない。しかし利便性、経済性を考えずにひたすらこの地の景観にふさわしい一幅の美しい絵を描こうとして、芸術的ではあっても、まともでない建物を設計することも賢明な方法とは言えない。建物の立地は、その建物の性質を十分に考えた上で決めらるべきものなのである。こうした諸点を考えた末、自然景観と建物の材料とをそれぞれ最大限に生かすことで解決点を見出さねばならなかった」。

校舎の建つ岡田山の地は、江戸時代を通して尼崎藩領の廣田村に所屬する土地であった。明治になり、旧尼崎藩主の桜井氏の別邸となっていたものを昭和五年に譲り受けたといわれる。旧廣田村の土地が桜井氏に渡った経緯については明らかでないが、村の柴山であったために、比較的良く自然が保持されていたものであろう。

岡田山の地層は、下部に更新世前期の大阪層群(約一〇〇〇〜五〇〇万年前)が横たわり、上部を更新世中・後期の上ヶ原段丘(約二〇万年前)の砂礫層が厚く覆っている。いずれも水平層であり、地盤は締まっている。校舎の建つあたりは、上ヶ原段丘の東南端に当たり、西北に高く東南に低い緩傾斜を示す地形である。また段丘形成後、次第に周辺部からの浸蝕が進み、小規模ながら多くの解析谷が台地面に喰い込んでいる。土地の人びとが昔から「上ヶ原の四十谷」と呼んでいたのはこうした地形を指している。

このような地形の岡田山に新校舎を設計しようとしたヴォーリズ博士は、原地形を生かし、切り取り・埋立の方法を極力避けながら、見事に地形を応用したのである。例えば谷頭の一隅に音楽館を設計して騒音の拡がりを抑える方法や、傾斜面をそのまま利用することによって、前面から眺めると三階建に見え、背面から見ると二階建という建て方を採用している。このように原地形を極力生かす方法は、基礎となる地盤が安定している点で、建物自体に狂いが生ぜず、ひいては耐久性に大きな効果をもたらすことになる。

筆者の住む夙川台地面の一角で、最近大規模な地ならし工事が行われた。この台地の高度は岡田山と同じであるが、成因は異なり、地層はすべて大阪層群から成っている。工事の行われた所は、大阪層群の下部層が、上部層に衝上する形で出来た断層面で、このため比高約二〇メートル程の小山の形をしていた。珍しい地質なので地質調査書や学術誌に写真が載せられている場所なのである。それが一〜二箇月のうちに、すっかり削り取られて台地面の高さ以下迄に地ならしされてしまった。近くここに高層マンションが建つという噂であるが、人災の最たるものがいつの日か訪

れることを私は深く憂えている。水平な地層ではなく、断層によって、殆んど垂直に近い角度で立っていた地層（恐らく地下数百メートル位迄同じ状態であろう）を削って、数十センチ程の地ならしの上に高層建築を建てようとする無謀な設計者の存在を歎かわしく思う。

話は本筋に戻って、ヴォーリズ博士はまず建物全般の様式を何調にするかの点で日本様式と西洋様式とを比較した。日本建築の持つ「線と均整」による美しさを認めながらも、「教室への採光の不十分さ、建物全体の延面積の広大さ、従って効果以上に廊下が長くなり、ひいては建築費やその後の維持費が極めて高くなる」として、「究極的な日本様式というものは将来の課題であって、今は一応仮の、又試作的なものにすぎない」とつつましやかに述べている。同時にまた「伝統的様式の建物〔日本建築〕は、この場所での立地に当たっても、又気候条件の上でも、結局不適當であるように思えた。その代わりに、ある点で地中海様式が要求を最も良く満たすように思われた。そこでこれら地中海様式が、外觀・全体の細部についてもとめられる設計図の基礎となった。しかし、解釈の上では色々と自由裁量をした。そして、常に実用性が優先保持された」と述べている。

ここで言う実用性とは(1)管理上の便利さ、(2)教育効果、(3)健康な生活、の三点を指して、全体の建物配置は無論のこと、個々の建物の構造（外觀・内装共）においても、この三点が十分に配慮されている。

建物全般の配置については、(A)大学グループ、(B)中高部グループ、(C)住宅グループに大別しているが、特に大学グループについては、それぞれに特徴を持つ文学館・理学館・音楽館と共通の図書館・体育館をも含むため、その配置に特に苦心をしたことがわかる。従ってまず大学グループの配置については、西洋式のクワッドラングル（中庭を囲んだ長方形の建物配置）を採り、南面して総務館、北面して図書館、東側に文学館、西側に理学館を建てるとともに、渡り廊下で連結させながら、音楽館と体育館を南と北に、離して配置したのである。特に音楽館については、学科の性質

上、騒音が他の建物に影響を及ぼさぬよう、クワッドラングル面より一段低く、一つの谷をほぼ原地形のまままで利用しているとともに、繁茂した周囲の樹林(残念ながら近年の増築でかなり消滅)によって、音の拡散を防いだのである。既既述したように正面からは三階建に見え、裏側からは二階建と思われるのは、出来る限り原地形を破壊しないという配慮の結果なのである。更に現在でも、音楽館からデフォレスト館に至る渡り廊下を通りながら、美しい樹々の姿が眺められるのはヴォーリズ博士の配慮の賜物にほかならない。

図書館については、「図書館の中央閲覧室はひとつの大きい部屋で、イタリヤ調にしつらえられ、北側の大きな窓を通して十分な採光が出来た。このため直射日光の眩しさをさけて十分な明るさが得られた」と述べている。

次にクワッドラングルの東西の側に向かい合う文学館・理学館について、「これらの建物は、やや長めの二階建て、いずれも教室・講義室・実験室と研究室から成っている。建物内の幅広い内廊下は暖色系のゴム張り(ラバータイル)なので、見かけが良く、しかも静かに歩くことが出来た」と述べているが、特に内廊下をラバータイルで貼りつけて騒音を防いだ点、現時点でこそ当たり前前に思えるが、当時としては先覚的構想であったと言える。一見贅沢に見えるこの構想が、その後の情操教育の上に大きな影響を与えている。現在でも本館(クワッドラングル内)を上履で歩くよう学生達に注意しているのは、こうした設計者の配慮に込めるためである。

「図書館の北側正面に総務館があり、これでクワッドラングルが閉じられたことになる。その背後には極めて接近して講堂とソール記念礼拝堂がある。これら三つのものが集まって一つの建物になっている。講堂は座席数一〇〇〇を持つ明るく風通しの良いホールであり、演劇用の広いステージが備わっている。丸味のある天井は、その材料に吸音性を持つものを使っているので音響に問題がなく、平常の声で充分隅々迄聞こえる。礼拝堂は極めて威厳のあるロマネスク様式の小さな部屋であるが、内部は見事な均斉と厳肅さとを示している」。また、「大学の建物は皆鉄筋コンク

リートであるが、講堂だけは屋根の張間が大きいのでステイールの骨組になっている。それらの外部の仕上げは、二階部分はクリーム色の化粧漆喰、一階及びその他の所の装飾については、細長いレンガ大のブロンズ色のスクラッチ・タイルが広く水平に連結しており、クリーム色のモルタルがめじを埋めている。その効果は建物の水平の線の強調にある」と、外装にも工夫をした様子が文面から理解される。

大学グループの屋根について、「屋根はかなりゆるやかな傾斜をもち、茶・赤・ブロンズ色の混ざったスペイン瓦で覆われている」とあるので、建物としての神戸女学院の特徴の一つ一つに、こうした細やかな気配りのあったことがわかる。「廂の雨樋はコンクリート製で、屋根自体の一部になっている。堅樋は銅製である。日本のように多雨な国では、これらの特徴―それに、建物の間の屋根つきの渡り廊下―は非常に実用的であり、この場合、それらがまた魅力を添える要素となっている。渡り廊下には、建物と同じ瓦がふいてあって、それらはまた、独特の片流れ屋根で、クワドラングルの内からと外からとで全く異なった効果をもし出している」。

一つ一つの建物も、廊下もその配置と形態と色彩の上で、見事な均斉と調和を示しているため、各部分における細かな配慮を、ややもすれば見落とし勝ちである。しかし、こうして当時の設計者の手記を読んだのちに建物その他を見直してみると、いかに細部にわたって気を配り、材料の選択・造形の表現などに並々ならぬ苦心をしたかが窺われる。創意工夫という言葉が正しくこの場合に当てはまると思う。

クワドラングルの東北隅から、ガラス窓付きの渡り廊下が北に伸びて、体育館に達している。この廊下が全天候に耐えられるよう、窓を持つトンネル状廊下にしてあることは、実に優れた構想である。雪国ほどではないにしても、強風雨から子女を護り、安心して体育館との往復が出来るようにした暖かい配慮である。又体育館は、設計当初は地下二階、地上二階と記されていたが、現在では地下一階、地上一・二階と呼んでいる。

次に中高部グループは、講堂から東北に伸びる全天候廊下によって結ばれた大きな建物である。「この建物は、丘陵の最高点からほんのわずかに離れ支脈の位置を占めている。そして神戸女学院のすべての建物の中でも最大の建物である。というのは体操場をも含めて、中高部のあらゆる分野を包含しているからである。建物自体は、大学グループと共通した一般様式は持っているが、なお独立性を示す十分な相違をも持っている。特色ある相違というのは平屋根であるという点にある。これは屋外活動に用いる空間を増すためである」。確かに学院の建物の中で平屋根形式は中高部だけである。しかし、屋上での活動を考えて設計した平屋根方式も、現在あまり使われていない実情にある。多雨な日本の気候のもとでは雨漏りなどの懸念があり、耐久性の点でも、必ずしも学校建築等に適用するとは言い難いようである。ただ中高部全般の建物自体は、際立った特徴はないが堅牢さの点では講堂と並ぶものと言えよう。五〇年の星霜を経ても、いささかの狂いも生じていない。

建物配置上の分類で言う住宅グループの中には、大学寄宿舎・中高部寄宿舎・家政実習館・外人住宅（エッジウッド・ケンウッド・グリーンウッド）・同窓会館およびその他の小住宅が含まれる。

大学寄宿舎はキャンパスの最北端に立地している。この設計についてヴォーリズ博士は「大学寄宿舎は、中央に中庭を囲み、ダイヤモンド型をした独創的な設計である。このために学生達のすべての部屋はほぼ南面することになり、日光を最大限に取り入れることが出来る。社交室・食堂・来客用の部屋が、学生達の部屋以外に設置されている。来客用の部屋以外は現代の風潮に従って、また健康上も非常に好ましいため、すべてをヨーロッパ式とし、ベッド・椅子・全寮生用の机が備え付けられている」と記している。

ヴォーリズ博士が設計した寄宿舎は、現在北寮と呼ばれているものに当たり、その後、南寮（昭和三十一年建築）と新寮（昭和四十三年建築）が増築されている。しかし当初に建築された北寮が、居住性において最も優れていると言われる。



次にこの大学の寄宿舎に隣接して、現在、東寮と呼ばれる中高部の寄宿舎がある。「これは小さな建物でデザイン上際立ったところはないが、設備は同じである。食堂は〔大学とは〕別であるが、双方が一つの調理場から供給を受けるようになっていた。そして後日〔寄宿舎が〕増築されても、この同じ調理場で全てを賄うことができよう」。

寄宿舎の東南部に立地する三軒の外人住宅は、その暖房施設（当時としては珍しいスチーム式）を寄宿舎と共にしているために、昼間の供給がないという不都合な点もあつたようである。しかしいずれにしても昭和九年（一九三四）という時点において、キャンパスのすべての建物がスチームによる暖房施設を備えていたということは正に画期的な設計であつたと言えよう。

現在では移転して岡田山ロッジと呼ばれている建物は、ヴォーリス博士の設計になり、現在の同窓会館と同じ位置に建っていた旧同窓会館である。

ヴォーリス博士は、手記の締め括りとして、正門とドライブウェイにふれ、更にこのキャンパス全体が学生に与えるであろう影響に言及するなど極めて印象的である。即ち、「正門とその詰所には注目して欲しいが、それが更に地中海的な雰囲気の基調を作り出している。ドライブウェイは、円柱で支えられ、ゆったりとしていて均斉のとれた鍛鉄製扉を持つアーチを通り抜けて、内側に進むのである」、「側面に松林や灌木林を伴い、丘陵の上に至る曲りくねった道路、また樹の間ごしに見えかくれする建物など、すべてが自然環境としてのこの地の景観にびったり一致しているように思われる」。

「効果を期待して最も力を入れた点は、建築物内外におけるバランスのとれた比率を追求する試みであつた。バランスのとれた建物は、必ずや学生達に安定感を与えることであろうし、又その趣味や見識の基準を教え込むことにもなり、学生達の生活は、この地での勉学と人格陶冶を通して、深い感化を受けることであろう」。優れた設計者ヴォ

ーリズ博士の言葉は以上の通りである。

さて、中国の韓愈雜説の中に「世有伯樂、然後有千里馬」(世の中に、眼ききの伯樂がいて初めて、千里を駆ける名馬が現れるものである)という言葉がある。神戸女学院の見事な建築物をめぐって、それを設計したのがヴォーリズ博士であったとすれば、それを造り上げた人が竹中藤右衛門氏を代表とする竹中工務店である。そのいづれを欠いても、今日神戸女学院の優れた建築物は出現し得なかつたと言える。どちらが伯樂であり、どちらが駿馬であるかを、ここで問題にする意図はない。二人の優れた人物の出合いによって、又二人の心の絆の強さによって、様々な苦難を越えて、この世紀の大事業が達成されたのである。こうした観点から、次に竹中工務店の代表者、竹中藤右衛門氏の手記(ジヤパン・アドヴァタイザー紙への寄稿原稿で、デフォレスト文書に収録されている)を掲げることとした。

永き歴史を誇る吾が神戸女学院が岡田山高地に輪奐の美今や完く成り阪神両大都市を睥睨して更に輝しき飛躍の第一歩を踏み出されんとして居ることは私にとっては無上の感激である。新校舎新築に当り全工事を挙げて竹中工務店の施工に一任されたるその信頼に對して改めて満腔の感謝の意を表す次第である。今回のこの絶大なる信頼に對して私は最初より非常な責任感を抱かざるを得なかつた。即ち全身の誠意と溢るるばかりの熱心とを以て工事に当りあらゆる忍び得べき犠牲を忍び以て最も経済的にして学院当局者の希望に副ふべき立派なる殿堂を提供せんことを日夜祈って居た次第である。

然るに着工に先<sup>マ</sup>って一大難関に遭遇したのであった。それは益々発展すべき学院の將來を見究められたる学院当局



竹中藤右衛門氏

者の遠大なる理想の下に最も経済的に然かも最も藝術的にヴォーリズ氏の手によりて設計されたるプランが到底既定の予算を以てしては成し遂げ難きものであったことだ。普通の営利会社と異り限られたる予算を超過するといふことは容易なことではない。如何にしてこの限定されたる費用を以て学院当局者の希望を出来得る限り充すが吾々に與へられたる最初の大きな問題だった。然るにその費用が遠く太平洋の彼方の友邦の同情ある多数の人々の淨財を集めたるものなることを聞くに及び更に又学院が阪神両都の間に位しキリスト教主義の教育により將來の我国文化の発展に資する処少なからざるを思ひ私が日頃念願とせる建築報国の意味よりして出来る限りの犠牲を拂って工事の完成に努力することに決心した。それは学院当局者並にヴォーリズ設計事務所の理解ある協力を得たことに依って始めて成し遂げられたことであつた。即ちこの工事は実に立派なる校舎の完成といふ唯一の目的のために各々が自己を犠牲にして協力一致二ヶ年の歳月にわたり努力し来つた国際的な美しい大事業であつた。私はこの点に一の大きな意義が存してゐると思ふ。この協力一致の美しい精神が新校舎に移る学院を通じて全日本より全世界に押し括められることを

希つてやまない。学院当局者もヴォーリズ設計事務所も夫々枝葉の問題に捉はれることなく常に終局の大目的のために施工者を指導し協力された賜であることを深く銘記しておきたい。

然し乍ら工事中には施工者として種々の困難に遭遇した。内部的には学院としては出来得る限り完全なるものを造りたいといふ念願より施行中当初の設計々畫に比し種々の変更やり替へ等の少くなかつた点である。之は施工者として最も當惑する点であり経済的にもロスも多いものである。又それがため工事期間が普通以上に永引いた結果学院も施行者も共

に豫想外の費用の支出の必要にせまられた。然し大なる目的の爲めには或る程度の犠牲は忍ばねばならなかった。次に外部的原因による影響の大なるものは金輸出禁止による為替相場の急激なる変動引いて起つた建築材料を含む物価騰貴であつた。之は実に豫期せなかつた事件であつたが請負者として当然忍ぶべき事柄である。之が為非常なる打撃を蒙らずに済んだ事は不幸中の幸と思つてゐる。

其他種々の困難も存したのであるがあの大工事に於て一人の生命の犠牲者をも出さずに済んだことは如何なる困難苦痛をも償つて尚余りあるのではないか。若しこの工事に於てたとへ一人たりとも尊き人命を無残にも犠牲に供して居たならば岡田山の第一頁を飾るべき学院の歴史の上に暗き一点が印せられると想像するだに不愉快である。幸にもこの第一頁を穢さずに済んだことは実に欣びに耐えない次第である。そして更に感謝に耐えない点は全工事期間を通じて従業員全部の精神生活靈的生活に對して積極的に学院の感化力を及ぼされたことである。多くの従業員は未だ曾つて経験したことのない自己の靈的生活に眼を開かれたことと思ふ。斯かる多数の従業員によつて建設された建築物には自づとそこに他と異なるものが表現されてゐるのである。同じ職工にても之を指図し上に立つて指導するの地位にある者の如何によつてその仕事に精神のこもる場合と否とがあるのは一般に知られてゐることである。此の意味に於て施工会社の夫々の氣風といふものが建築物に大いに影響し来るといふ点を痛感している私はおこがましい言分ではあるが今日通常に竹中工務店の店風といった様なものを強調し来り誠意と深切とを第一義として成れる建築物には自づと一種の氣品を備えてゐるといふ点を漸く世間でも認められる様になつてゐるのであるが今回学院当局者の建築従業員に對してとられた行為は私の日頃の主義を強調された意味にて特に感謝に耐えないと思つてゐる次第である。學院はその設備に於てその結構に於て本邦稀にみる完備し宏壯にして善美を盡せる校舍を得たのである。各種特別教室、實驗室、図書館、屋内体操場等総て最近の設備を整へてゐる。更に特筆せねばならぬのは近来兎角欧米の長を

採るに急にして吾国古来の美風を忘れ勝ちなるに拘らず学院の如き国際的學校に於て実に立派な茶室の建設せられたるは寔に時宜に適へるものとして喜びに耐えない。之によって日本のよき情操教育の施されんとせることは實に意義深く考へられるのである。

風光明媚の岡田山の高地に築かれたこの学院は世界の船の集る大阪湾を俯瞰し日本の台所大阪と日本の玄関神戸とを左右に控へ生きたる教育の地として實に申分のない地位を占めてゐる。然してその校舎が右に述べた様に美しき精神の下に立派に頑丈に完成されたことは今後の学院の發展に對して實に意義深いことと言はねばならない。然して学院の工事を一任され施工するに当り平素微力乍ら私が心掛けてゐた請負業の向上と建築報国の念が期せずして達せられつつあるを思ひ心からの感謝を捧げると共に神戸女学院が更に斯くの如き威大なる感化力を以て日本文化の向上發展と人類協力の為盡されんとする時この立派なる學舎を得て一層内容充實しその大を至さんとせるは實に邦家の為めに又世界人類の為に欣快に耐えない次第である。